

恐れるな、と言われても

先週は奥田センターの夕礼拝で、メシアの先駆者である洗礼者ヨハネの誕生がザカリアに告げられた箇所を取り次ぎました。そして今朝の聖書箇所は、このヨハネに続いて、メシアであるイエスの誕生の告知、有名な受胎告知がマリアになされた箇所をとりあげます。こう右手と左手を組み合わせますように、ルカは美しく丁寧に神の御業が実現に至るまでの出来事を取り次いでゆきます。

この喜ばしい知らせを伝えたのはザカリアに遣わされたのと同じ天使ガブリエルでした。しかし、当然のことながら神の使いの派遣を通してマリアに伝えられた使命は彼女を戸惑わせるのに十分なものでした。今朝は、この出来事を通して、わたくしども人間を用いて御業を現してゆかれる神の恵み深さについて思い巡らしたく願っています。

わたくしは女性ではないので子どもを与えられるという体験、正確には子どもを身に宿すという体験はしようがないので、その気持を押し量ることくらいしか出来ないのですが、子どもを授かって出産に至るまでの期間、一般に十月十日と言われるような期間のあいだに、女性はどのような事を思われるのか、世にマタニティブルーなどという言葉があるくらいですから期待や、不安などさまざまな思いを持たれるのだろうと推察します。仕事をしていたとしても職場を離れることになったり、経済的なことが気になったり、単に出産自体に留まらない様々な不安もあるでしょう。ただこれは期間限定ですね。誕生してしまえばその喜びのなかに段階が移ってゆく、もう生まれるまでのことは思い起こさない。そういうたぐいのものでしょう。その意味ではこの不安は期限の比較的はつきりしている不安

という気がします。わたしたちが体験する不安の多くは期間が定まっていません。まさに、この、いつ解決するか分からないということ、本当は明日にも劇的に解決することがあるのかもしれませんが、その期間が分からない、見定められないというところに、不安の不安である一番の原因があるように思います。明後日までの不安というように期限がわかっているならば、あるいは「冬来たりなば春遠からじ」という言葉があるように季節が変われば問題が取り去られるという確約が与えられていれば、わたしたちは耐えることができるでしょう。しかし、この時がいつまで続くかをわたしたちが知らないということが苦しみを耐え難くし、わたしたちの心をくじけさせるのだということをおぼえています。だからこそ、神の使いが、つまり、神さまがわたしたちになにかミッションをお与えになるとき、伝えたい、伝えなければならないとお考えになっていることは、わたしがあなたと共にいる。恐れるな、という呼びかけなのです。もう少し丁寧に言いますと、恐れることはない。つまり、あなたは恐れる必要はないのだということです。このことをマリアの場合を通して見てみましょう。

天使が訪れて、あなたは身ごもるでしょうと告げることは、日常ではありえません。天地がひっくり返るような驚きです。神の御業に用いられる第一歩はいつも驚きから始まります。ある使命に召し出される。モーセではありませんが「一体、わたしは何者でしょう。どうして～」と口をついて出そうです。なぜわたしが？お断りの理由が幾つも思い浮かびますね。わたしの経験ですが、神学校を卒業して4年目だったと思います。まだ奥田センターの2階にすんでいた頃、東京神学大学のレーマン先生から電話がかかってきて、何かと思ったら、夏期伝道実習の壮行会の説教者として来てくださいという依頼でした。

全力で断りました。わたしも在学中、この礼拝に毎回出ていましたが、外部から呼ばれる説教者はそれなりに経験を積まれたベテランの方、よく知られている方でしたから、なんでわたしのような若造がと思って断ったのです。この時にレーマン先生がわたしを説得した言葉が、今日に至るまで牧師として生きるわたしの覚悟を決めたようなところがあります。わたしが、先生に、色々とお断りの理由をあげたすえに、他に適任者が～と言いかけると、その言葉にかぶせるようにレーマン先生が、あなたが適任者です、と言われたのです。二の句が告げなくなりました。そして御言葉に仕える者として立てられた牧師が、差し出された召しに対して、年齢や経験をたてにしてお断りをするには実は不信仰なのだ、祈って申し出られたことに対して、神が用いてくださるといふ信頼をもって臨まなければならないのだと教えられた出来事でした。「あなたが適任者です」という言葉は、わたくしにとって、一生、忘れられない言葉です。

マリアにもそうしたかたちで神の召しが伝えられました。しかし、それは非常に重く、厳しいものでした。彼女の命すら脅かしかねない危険があった。なぜならマリア自身も「どうしてそのような事がありえましようか。わたしは男の人を知りませんのに」と尋ね返したように、婚約中でありましたが実質的な結婚生活は始まっていない段階で、神の恵みによって男の子を身ごもると告げられたのです。これは姦淫とみなされてモーセの律法にしたがえば石うちの刑に処せられるケースです。さいわい夫ヨセフのところにも神の使いが現れて執り成したことがマタイによる福音書にはありますが、ルカはそのことを記していません。マリアにとって、この神の召しはその生涯の人生設計を変えてしまうような出来事の始まりだったのです。戸惑うし、不安に思うし、怖じ感って当然の出来事です。しかし神

さまはこうしたわたしたち人間の側の事情をよくご存知です。ガブリエルは「おめでとう。恵まれた方、主があなたと共におられる」と呼びかけました。ここでは神の選びは神の恵みであり、祝福であるという宣言があります。なぜでしょうか。それは、神さまは必ずご自身が使命のために立てられた者に備えをして下さるからです。その約束が、主があなたと共におられると最初に宣言されている。イスラエルとは神が戦われる、神が支配されるという意味の名前です。神が共にいて戦われる。支配される。そのもとにあなたはわたしの召しに仕えなさい、働きなさいということが言われているのです。戸惑いは隠せません。恐れもあります。しかし、神さまの祝福はそれらに勝るのだということをガブリエルは最初に伝えたのです。それを、マリアは段階を踏んでその身に刻んでいくことになりました。神に用いられる者は何よりも身近に彼らが負った使命によって神を感じるようになるのです。神の器とされることによる悩みはあり、苦しみはありますが、同時に神が近い存在となって支えられる。主導権は神さまの側にあるのです。「わたしは主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように」というこの後のマリアの言葉は、彼女の信仰を伝えるものとして大変有名ですが、カトリックのマリア崇拜の影響を受けて、わたしなどは必要以上にマリアの服従と信仰が強調されているように感じます。またこの直前のザカリアの洗礼者ヨハネの誕生の告知の時の対応とも比較されてマリアがあげられるところがあるように感じます。「わたしも妻も年を取っているから、どうしてそのことが起きると信じる事が出来ますか」と聞いたザカリアは口がきけなくなってしまいました。それに対してマリアは～という持っていき方ですね。しかし落ち着いてそうした先入観を取り払って読めば、マリアとて尋ね返しています。

「どうして、そのようなことがありえましょうか」と口にして
います。これはザカリアと同じです。ただ違う点は使命の重さ
です。ザカリアに与えられたのは洗礼者ヨハネが誕生するとい
う喜びの告知でしたが、マリアは直接、この神の使命を担わな
なければならない身、御業のために用いられる受け皿として、全
面的な献身が求められる働きでした。わたしたちに与えられる
神の召しは様々です。神さまはその人にあった対処のされ方を
なさいます。人間の側はいつも不信仰です。自分のウチを覗き
込めば能力も、体力も、様々な面で資格はありませんと言わざ
るをえません。自信がなく、与えられた使命の重さに尻込みし
たくなります。そうしたわたしたちの恐れや不安、不信仰が「ど
うして」「なぜ」「いつまで」という声となって神に向けられま
す。しかし知っておいて頂きたいのは、神さまはそうしたわた
したちの弱さや不信仰をよくご存知であり、その不信仰を上ま
わるかたちで恵みをくださるということです。試練の大きさ、
使命の大きさに比例して、神の恵みも増し加えられています。
マリアには、しるしとして叔母にあたるエリザベトの妊娠が告
げられます。6ヶ月たってからガブリエルがマリアのところに
遣わされたというのも、人間の目には不可能に見えることでも
神には出来ないことはないのだという事実を知らせて、マリア
の心と信仰を守るための神の配慮でした。時が満ちればヨハネ
が生まれる。お腹の大きくなってゆく叔母の姿はマリアを励ま
したでしょう。「わたしは主のはしためです。お言葉通り、こ
の身になりますように」という発言の前の部分、「わたしは主
のはしためです」は、マリア自身の不信仰の告白であり、「お
言葉通り、この身になりますように」が、主よ、あなたの御手
に、わたしを委ねますという信頼の告白です。神はこのように、
神の前にくずおれ、自身を譲り渡す者を豊かに用いられます。

恐れや、不安は、わたしたちの自然な感情であり、日常につきまとうものです。しかし、それはわたしたちが自分の手に握りしめるもので、自分の計画で、この世を生き抜こうとしているからです。神はご計画に従って召し出された者たちと共に働かれ、この世界に御業を現してゆかれる。待降節から降誕節へといたるこの季節、わたしたちの中に宿ってくださるまでに身を低くして来られる救い主をお迎えするために、わたしたちも自らの歩みがどこに依りどころを置いているかをもう一度確認し、用いてくださる主の恵みと憐れみを弁えたく願っています。

お祈りいたします。